

普通科一本化と高大一貫教育

内海長次郎

私学は公立と違って、生徒募集が一苦勞で、なかなか容易なことではないということは、私が本学園に就任する以前からすでに話には聞いていたが、実はこれ程までには考えていなかった。私は、昭和四十五年四月一日付をもって、広島文教女子大学助教授兼附属高等学校主事という職名で就任したのであったが、忘れもしないが、着任後間もなく私のためには顔つなぎの意味も兼ねて、旧安佐郡内の中学校長さんの集会があった。やがて酒の席となったが、その場の空気が、なんとなく一種險悪で、本学園に対する不信任に満ちていた。だんだん耳を傾けて聞いて見ると、こうであった。

当時、付属高校の入学試験には一般入試の他に、奨学生入試と共に、推せん入試という制度があって、問題は推せん入試に関してのことであった。というのは、文教付属高校一本で受験する者は、学業人物共に本校生徒としてふさわしい生徒であるという中学校長の推せんがあれば、優先的に扱うということになっていたらしい。ところが、推せん書をつけて受験させたところ、結果は、推せんしたにも拘らず多数の不合格者が出ているのはどうしたことか、校長の面目が立たないではないかということらしい。実情は後で聞いて見ると、推せん理由が「付属高校一本で受験する」という点だけにしぼられていて、学業人物という点は、むしろ他校を受験したのでは合格の見込みが薄い生徒が多かったということである。推せん制度は、本学園としてはレベルの高い生徒をできるだけ多数確保したいと

いう趣旨で始められたのに対して、中学校側では推せん書の効果をねらうという、重点の置き所が中高の間に相違があったようである。いずれにしても、これ程不自信感があったのでは、今後の生徒募集に少なからぬ暗雲が低迷しているようで、容易ならぬものを感じたことであつた。

その当時は、前記のように一般入試とは別に、奨学生入試があり、推せん入試があつて、もちろん入試問題もそれぞれ別に作成する外、採点、銓衡その他入試に付随する入試事務が前後三回あり、更にその他にさみだれ入学と称するものがあつて、公立その他の入試に失敗したものの中、実力もあり人物もすぐれていると思われる者に対して、特別に追試のような格好で機会を与える、いわば二次試験のような制度がある等、本校生徒としてふさわしい生徒をなんとかして多数收容するための特別のはからいがあつて、入試時期は多忙を極めていた。しかし、推せん入試にも前記のような問題があり、奨学生入試にも予想に反した結果が見られ、いわゆるさみだれ入学には、たしかに素質のすぐれた生徒がかなり入学したが、最初から本校を受験した生徒の手前、いろいろと面白くない面も生じて来て、入試全般について抜本的な改善策を練らねばならぬ時期に迫られて来つた。

さて、私学にはどこでも独自の建学の精神というものがあつて、これが私学の独自性を發揮していることはいうまでもない。本学園は、昭和二十三年四月、建学者武田キキ学園長が「誠に徹した堅実なる女性の教育」を目ざして創設された学園で、いかなる悪世相にもまどわされることなく、いかなる苦難にもくじけることなく、勤勉努力によつて自己を練磨し、誠の心で強く正しく生き抜く女性の育成をもつて学園建学精神の根幹となし、これに基づいて、次のような三カ条の学園訓がある。

- 一、真理を究め、正義に生き、勤労を愛する人になりましょう。
- 二、責任感の強い、たくましい実践力のある人になりましょう。

三、謙虚で優雅な人になりました。

高校においては、朝礼、ホームルームその他あらゆる機会にこれを朗読唱和して徹底を期しており、「心の教育」「人間教育」を前面に打ち出したすばらしい教育方針というべきであり、これが受験生にとって何よりの魅力とならなければならぬ筈である。受験生とその父兄にとって当面魅力となるものは、さにあらずして通学の便がよく、施設設備の整っていると共に、社会的評判が高く、卒業後の進路が保証され見栄が張れる学校ということらしい。また、特に現在のところ、一部の私学を除いて、公立優先の考えが強く、いわゆるすべり止めに私学を受験する者が多く、たとえ私学に合格しても、本命の公立に合格したとなると、潮のひくように公立に流れこむのが実状であって、資質のすぐれた生徒数を確保する上から、毎年私共の遺憾にも思い、むなしささえ感じたところである。

以上は、直接入学試験に關してのことであるが、それより以前の広報活動が公立では余り見られないことで、毎年九月初頃までには学校生活のスナップ写真を数多く取り入れた入学案内書を作成して、入試関係書類と共に中学校宛に発送したり、十月から十一月にかけて主だった中学校に向向いて、生徒や父兄を対象として学校説明を行うのである。これはそれぞれの中学校で予め計画された日時の中で、私立高校教員が集まり、交替で、恰も立会演説のように学校の特徴について説明するのである。説明する方も十数分間に効果的に話すことは一苦勞であるが、聞く方も、入れ替り立ち替りで大変なことだと思われたが、ともかく私学における年中行事の一つになっており、各校校長か、教頭か、もしくは広報係の職員の大切な仕事になっている。これは入試以前に、学校の特徴について責任者が予備知識を与えることで、ガイダンスとして有意義なこととも考えられるが、あわただしさを感じざるを得ない。

私学において、もう一つの問題を感ずることは人事の問題で、特に教員採用の場合、後手後手にまわっておくれない、思うような採用が困難なことである。私は公立にいる時から校長の最も大きな仕事は、優秀な教員を物色し

て採用することで、そのためには、悔いを残さないように万全の手配をすることが自己の責務であると信じて努力して来た。現在、高校あるいは大学で活躍されている方々の中にも、私が懇請して就任していただいた優秀な方が何人もおいでになって、楽しい思い出の種になっている。私学ではそれが思うようにならないで、せっかく希望をつないで待っている中に、年度末になって「公立校に採用が決定したので悪しからず」と断ってこられ、あわてて次を物色することが屢々あった。それは、ちょうど私学に合格した生徒が公立高校へ流れ込んで行くのと同じように大きな穴が生じて、何度も残念に思ったことであった。最近では、私学だけの教員採用試験が行われるようになって、以前のようなことはないかもしれないし、また優秀な方で、私学なればこそぜひ就任したいという人が増えて来たことは、何より嬉しいことの一つである。

普通科一本化

こうした諸情勢の下で、本学園では申し合わせたように踏み切られたのが、普通科一本化と高大一貫教育への移行であった。もっとも、武田学干理事の御述懐によると、昭和四十一年頃からすでに統計をとる等して、普通科一本化へ向けて計画が進められていた由であるが、本校は元来、可部女子専門学校として発足した家政科中心の学校で、普通科、商業科、被服科、食物科の綜合制の高等学校であった。また、食物科の中、希望者には調理師の資格が与えられるコースがあって、生徒にとっては、親切なお膳立てができていた。ところが実際は、この調理師の資格をとるための教育課程はかなり複雑で、その中の特定の専門科目を担当する講師は、医師とか、薬剤師とか、あるいは栄養士とか、特定の資格の所有者でなければならぬといった条件もあり、授業時間の特別の割振りも必要であったり、その陣容を整える上に学校としても随分苦心も要した。また、生徒の側でも、受講希望者が年々減少して来て、遂にはクラスの構成も困難となり、更に商業科はともかく、被服科も年々志願者数が落ち込んで来て、反対に普通科全盛の時

代になって来た。これは本校だけの傾向ではなく、社会全般の一つの趨勢であって、普通科の定員を増員せざるを得ない状態に立ち到った。

そこで遂に、昭和四十八年三月三十一日付をもって普通科の生徒定員を七五〇名に増員し、商業科・被服科・食物科の廃止を断行された。今、記録によると、昭和四十七年一月二十日委員会を開いて、四十八年度からの普通科一本化に伴う教育課程編成の基本方針について協議しており、同年一月二十五日、理事長から改めて普通科一本化による教育課程案をつくるよう指示がされている。因に、普通科一本化について、地域内の中学校側の声としては、概ね大賛成で、全面協力の意を示され、われわれも意を強うした。しかし校内においては、商業科・被服科・食物科、それぞれの関係教職員にとっては、なんとといっても打撃が大きく、寄り寄り協議が進められていた。昭和四十七年七月十二日、職員会議を開き、普通科一本化についてのカリキュラム立案について賛否の裁決を行ったところ、十一対十というきわどい票数で可決している。この日は、この地方では珍しい洪水に見舞われ、三次地方は未曾有の水びたしとなり、校内では期末試験の三日目であったが、寮生は前夜学校へ避難するという騒ぎもあり、第二校時から臨時休校にして自宅に帰すという非常事態が生じ、忘れ得ない思い出の日として多くの人の記憶に残っている。

なお、カリキュラムについて学内役員会において一応の線が出たのは、翌四十八年一月十八日のことであったが、職員間では、二月十四日放課後に全体会議を開いて、A・B・C三類型(家庭コース・就職コース・進学コース)づくりと、選択科目の単位数(二十一単位(現在は六単位))をめどに立案することを決定したのであった。その間の教務部のご苦労は察するに余りあるものがあつた。

前記の如く、普通科一本化についての中学校側の態度は、極めて協力的で、全面的に賛意を表されたが、果してその翌年、昭和四十八年度の入学試験の状態を見るに、受験生が前年より八十名増した外、合格者も六十名、入学者も

三十名増員となっている。普通科一本化は期待していたような好結果が生じて、目の前が明るくなって来たような気持ちが出て、大いに希望が湧いて来たが、普通科一本化に基づくカリキュラムの改訂に伴い、人事の過員整理という難問が生じてきた。

募集停止になった商業科・被服科・食物科教員の過員整理の問題は、当初より懸案の最も苦慮を重ねて来た案件であった。もっとも、その中、商業科にあつては専任教諭三名中二名が過員となるが、一名は年度末を待たないで地方公共団体にあつて専門教養を生かした重要なポストに就任することになって転出を申し出られ、他の一名は、旧市内にある女子商業高校に栄転ができて、早々に解決できたが、一方、家庭科にあつては、専任教諭四名中三名が過員となり、いずれも家庭を持たれ、扶養家族も多く、今が働き盛りという状態で困難を極めた。組合との団交も重ね、折衝も続け、他校の調査もし、栄転可能と思われる先々には手を尽して当ってみた。ある短大への栄転は、後一步というところまで話が進んだが、成立をみななかった。最終的には、年金がついてからという条件つきで、退職金や保障金も学園としてはできるだけの準備をした上で、とりあえず短大や高校の非常勤講師として転出されることとなり、一応の解決をみる事ができたのであった。

これを今日回顧してみるに、個人の生活に切実にふりかかることであり、組合とのかかわり合いもあつて、容易には決しかねる問題と思われたが、商業科も、家庭科も、学園の将来に対する明るい展望に立っての、良心的な決断に基づく協力であり、譲歩であつたというべきで、学園の発展のために感謝の外なかった。人事問題は、常に人の世の哀歓を色濃く誘うものであるが、この場合もふり返って思い出の尽きないものがある。

学校移転の問題

普通科一本化と相前後して、学校移転の問題が起つた。事の起りは、昭和四十七年三月末、当時の附属高校の所在

地である中島校地を広島市民病院の用地として広島市に譲渡して欲しいと前可部町長から願ひ出があったが、理事長はきっぱりとこれを拒否された。しかし、行政の事務ミスというか、恰も学園がこれを承知したかのように、県当局は認可の手続きを済ませてしまった。事の意外に驚かれた理事長は、再三にわたって県の責任を追求されたが、追求が表向きとなり、きびしくなれば県庁内から責任者も出かねまじき情勢となり、加えて市民病院を設置するためということであれば、可部町を中心とする地域社会に貢献することにもなるので、次の諸条件、すなわち高校移転の可能な地が見つかること、学校を建設し、事後の運営可能な時価に見合う代価であること、その年の一年生はこの地で卒業できることの三条件を満足させることができれば、学園も譲渡に応じようということで話が落ち着いた。

しかる所、旧広島市に隣接している高陽町中小田の丘陵地帯はどうかという話が始まった。交通の便利もよいし、市内を俯瞰できる位置といい、環境も絶佳というべきで、生徒募集の上からも申し分がない。学校を移転するとすれば最適の地として話が進められ、学内役員会はいうまでもなく、校内の職員会議でも一人の反対者もない。話がとんとん拍子に進みかけたところ、PTAの一部から猛烈な反対が起こり、抗議の印刷物が第一信からつぎつぎと第三信まで出たり、同年三月十八日にはPTA臨時総会が開かれ、「下水について調査ができてるか」「整地の途中で岩石が出て来たらどうするか」等の質問が続出して、われわれも躍起になったりした。それに加えて、結成後間もない組合からは、大衆討議の要求その他について繰り返し団体交渉が申し込まれるし、当時全県的に頻発した差別問題、あるいは流行のように続出した生徒の非行問題等で、会議また会議、からだがいくつつあっても足りないような多忙を極める状態であった。

そのうち、学校移転の問題は、移転先と考えられていた中小田の山から考古学上極めて価値の高い古墳が発見され、やがて古墳を守る会という広島大学考古学教室を中心とした真摯な団体が生まれたりして、文化庁から正式に発

掘調査許可の文書は受理したものの、また、若干の工事は進められたものの、文化を破壊する暴挙は慎しまざるべからずとの見地から、自主的にこの地に移転することは思い止まった。別の有力な候補地に話を進めていたが、ここも下水処理その他隘路が生じて一頓座を来たした。

最終的には、広島市当局との約束を忠実に履行する必要から、五十一年八月末、大学の校地内に木造校舎を建築して仮移転することに話が落ち着き、五十二年七月末移転を完了した。もっとも仮校舎とはいうものの木造本建築で、管理棟、理科実験室等を含めた二階建て教室二棟、礼法室と家庭科教室等の平屋建て一棟、芸術科教室と生徒ホールの平屋建て一棟、別に倉庫一棟等、いわゆる使い勝手のよい明るい校舎で、植込みもあしらい、大学と兼用の体育館も二階建て校舎に隣接して作られた。更に、フェンスを廻らした本格的なテニスコートも二面設置する等、生徒や父兄の心情を配慮されての理事長の心意気と教育的信念を示された好施設で、仮校舎といったものでは全然なく、学校全体が落ち着いた雰囲気ですることができたことは、付属高校としては感謝の他なかった。

ただ、学校移転問題に関連して残念であったのは、この五十二年度の入学試験にあたって、せっかく志願者も九六五名と増加し、合格者も七五〇名、入学手続者も四六四名であったものが、学校が高陽町方面へ移転するという噂が禍して、入学取消しが相次ぎ、実際に入学した者は、僅か百名に過ぎなかったということである。しかし、このことは反面において、地域社会の本校に寄せる期待感の大きいことも示していて、今日から考えて何物にも代えがたい力強いバックアップの表われでもあったと思わざるを得ない。

なお、学校移転の話が持ち上がって以来、約十年間、その画いた波紋は大きく、いろいろと紆余曲折があったが、最終的には、大学校地裏側の山地を買収整地して、校地面積二〇七三二平方メートル、鉄筋三階建ての本館と体育館および別館の建物面積五五〇〇平方メートルが、大学校舎と見紛うばかりに、威風堂々と完成した。五十六年九月三

日、全校職員生徒が校旗を先頭に入校式を完了したことは、感激の極みであったと同時に、長期にわたって苦慮を重ねられた理事長並びに補佐役の武田理事のご感慨いかばかりかと頭の下がる思いがした。

頭が下がるといえば、もう一つ、大学校地から高校校地に通ずる約二百メートル余の新設道路沿いに高校同窓会の寄贈により、新校舎落成記念として、大和桜の並木を植樹していただいたことである。年々歳々、学園の発展と共に記念樹は成長してやまないであろうし、春ともなれば、高大を結ぶ華麗な大帯の如く、満開の桜花が微笑を投げかけ、登下校して行く全校生徒たちに、どんなに励ましともなり、慰めともなることか、同時に可部町の新しい名所の一つともなることと、今から楽しみみである。

高大一貫教育

本校は、前にも触れたように、前身は家政科を中心とした綜合制の高等学校で、曾ては被服科の作品展も地域社会から高い評価を受け、食物科の調理師にも特色があり、商業科からは珠算日本一も輩出する等の力強い業績と伝統を誇る人間教育を主眼とした学校であったが、時代の要請に応じて普通科一本に切り替えられたことは前述の通りである。更に本校生徒の大学進学希望者が逐年増加してきて、しかもその大半が、わが広島文教女子大学志望であるところから、高大一貫教育へと力強く踏み切られたことは、喜ばしい限りといわねばならぬ。付属高校からの広島文教女子大学志願者に対しては、従来とも種々配慮されたことと思われるが、昭和五十四年度から一般志願者とは別途に、付属高校からの受験者のみを対象として特別入試を実施することとなった。その際、付属高校在学中の学習成績も入試成績に加味して合否を決定するという付属高校生にとっては非常に有利でかつ教育的配慮の加えられた方法をとられ、年々進学者も増加しつつある。

由来、わが広島文教女子大学は、学長の方針で、精選主義を堅持して来られ、文学部も短期大学部も入試難易度の

高い大学となりつつある今日、付属高校生にとつては、まさに福音というべき方針である。同時に、専門學術の研鑽と併行して心の教育を強調して来られた学長にとつても、三カ年から五カ年ないし七カ年と長期にわたって一貫教育が進められるわけで、建学の精神の徹底の上からも喜ばしい限りと思われる。今後は、付属高校としても一層高大一貫教育の効率を高め、学力水準の向上を旨として努力し、独り本学のみに限らず、本学に設置していない学部、例えば薬学部、経済学部等へも、曾ての卒業生が、よい先例を開いた通りに、国公私立を問わず難関を突破して行ってもらいたい。そして、わが広島文教女子大学へも、願わくば付属高校からの志願者は全員入学できるという所まで評価を高めて行き、本精劈頭に掲げた諸々の私学の課題が、笑うべき昔物語りになるよう願ってやまない。

思えば、栄光ある私学が、恰も公立高校の補完機関的存在に甘んずることのいかに長かりしことよ。一刻も早くこのむなしさから脱却して、建学の精神を生かした権威あり、特色ある、自主独往の誇り高き学園として力強く発展するよう重ねて熱望してやまない次第である。

(元広島文教女子大学教授・元同付属高校長)